# 自己および自我を実現させる媒体としての「あなた」の心理学的含意

向井　敦子
深谷　澄男

## ［１］問題の発端としての人称代名詞の意味と用法

心理学的考察にとって，self および ego という概念が重要な役割を果しているのは周知のとおりである。論者にとって，まことに多様な意味で使われるのだが，一般的には，「自己」と和訳される self によって過程的側面が強調され，「自我」と和訳される ego によって構造的側面が強調されるという（中村，1990）。本論では，自己過程がどのように現れ，自我構造がどのように表されるかを考察することで，過程と構造を統合的に関連づけて認識するための視点を探索してみようと思う。このような試みをするにあたって，日本語の「自分」という表現に含まれている意味と用法が，重要な示唆を与えてくれるように思われる。

「自分」という表現を初めて意識させられたのは，筆者が大学に入ってまもなくのころ，新潟出身の友人に，いくどとなく「自分はどう思う？」と尋ねられ，奇妙に感じたときのことであった。「自分」とは「私」の意味であると思いこんでいたのに，彼は，「君」という意味で「自分」を表現していたのである。このことを彼に問い質したところ，不思議そうな顔をして，「自分」とは「君」という意味ではないのかと問い返してきた。それでは，「私」を指すときは，どのように表現するのか尋ねてみた。困った顔をして「オレかなあ，ワレかなあ。ワレは相手を指すような気がするし，オレでは無躾だし。」と返事に窮していた。どうやら，話し手自身を示す適切な表現が思い浮かばないらしい。というよりも，話し手自身を指し示して表現することその

ものが，彼にとっては奇妙な感じがするとのことであった。

「おまえ」とか「てめえ」という表現は，現在の通念では，聞き手を指し示すと考えられている。しかし，もともとは「おまえ」は「御前に」で,「てめえ」は「手前に」なのだから，相手の前でへりくだっている話し手自身を指し示していたはずである。それが，相手を指し示すようになり，しかも，もともとは相手を立てる謙譲表現だったのに，相手を見下す表現へと変化している。人称表現の意味と用法が変化してきた歴史的な経緯をたどり，人称表現に反映された時代的背景を，特に対人関係の結び方の観点から考察してみることは，とても興味深いことのように思われる。

「自分」という表現に含まれている心理学的含意を，自覚的に省察してみる必要に迫られたのは，つい最近のことであった。定時制高校のある生徒が，英語の入門書に載っていた表１を見て，おかしいと言い張るのである。ミスプリントでもあるのかと見直してみたが，おかしいところは何もない。その生徒が，何を訴えようとしていたのかを考えながら，あらためて表１を見ていただきたい。

**表１　英語の人称代名詞とbe動詞との対応関係**

| | 単　数 | | 複　数 | |
|---|---|---|---|---|
| 第１人称 | I | am | we | are |
| 第２人称 | you | are | you | are |
| 第３人称 | he<br>she<br>it | is | they | are |

その生徒によれば，英語の人称代名詞の意味と用法を表す表１を見て，話し手を表す第１人称と，話題に登場する人物や事物を表す第３人称では，単数と複数の表現形が区別されているのに，聞き手を表す第２人称では，単数と複数が同形であることが腑に落ちないのだという。虚をつかれて，思わず返答に窮してしまった。しかし，あらためて考えてみれば，まことにもっともな疑問である。こんなことは，普通ならば，こういうものだと覚え込んでしまうはずである。もっと精確に表現すれば，こういうものだと覚え込まされ，それで済まされてしまうところである。当り前なことに対して，素朴な疑問を発することができるのは，通常の学校教育から否応なく落ちこぼされてしまった，定時制の生徒たちの本領発揮なのかもしれない。

それにしても，これは大問題である。私たちは，主体（主観）および客体（客観）が，互いに独立して自存することを当然として了解している。この生徒の疑問を聞いたとき，このような思いこみに対して，もしかしたら本質的な再考を促す重大な契機を孕んでいるかもしれないと予感された。顧みてみると，「第１人称」と定義されることの背景には，主体として存在する話し手が暗黙のうちに了解されている。「第２人称」と定義することは，聞き手を客体として暗黙のうちに了解している。そして，「第３人称」という定義には，話題として客体化された人物の対象性と事物の対象性との識別が既に含まれている。第３人称の単数では，人物を表す he/she と事物を表す it を区別して，さらに，he と she によって人物の性を区別しながら，第３人称複数では they と総称することは，英語が，対象性を区分けするときの取り扱い方を教えてくれる。

ところで，第１人称および第２人称という命名と，その背景にある主体と客体についての暗黙の了解に鑑みて，人称の認識が，第１人称から第２人称へと発生するのが当然だと見なされている。しかし，はたして，そうなのであろうか。もし，第１人称である主体が先にあって，第２人称である客体を認識すると見なすのならば，その主体の認識が，どのような構制によって可能になるのかという問に答えなければならない。ただ単に主体を認識する

主体を想定するのでは，金太郎飴のように，とめどがない。人称の認識発生を心理学的観点から見直すと，もしかしたら，第２人称の認識が，第１人称の認識に先立つのではないかと予感されるのである。

すると，英語では，第２人称の代名詞を単数も複数もyouで表現し，対応させるbe動詞は単数も複数もareであるという事実が，奇妙に気になってならない。なぜなら，areは，主語が複数であることを表すbe動詞のはずだから，英語では，一人の「あなた」に対しても複数的な意識を孕んでいることになるからである。なぜ，第２人称の代名詞は単数と複数が同形で，単数のyouにも，複数的な意識を表すareを対応させるのであろうか。この疑問を言い換えてみると，第２人称の単数形で意識されている複数の人は，いったい誰と誰なのであろうか。そして，第２人称単数形が意識している人たちは，第２人称複数形が意識している人たちと，認識論的に同資格者として見なすことができるのだろうか。同資格者ではないとしたら，両者の間に，どのような差異が意識されているのだろうか。

## ［２］「自分」というコトの発生源としての二者関係

とりあえず，英語の第２人称単数形が，複数的な意識を含んでいると仮定してみると，日本語の人称の意味用法との，不思議な一致を読み取ることができる。通常は話し手を表すはずの「自分」が，地方によっては聞き手を表すために使われているという事実を想起し，聞き手を表す「おまえ」が，本来は話し手を表していたという事実を想起してみれば，このような一致を了解できるだろう。「おまえ」という被指示者が話し手から聞き手へと変化したのは，恐らく，「おまえ」という表現そのものが，初めから話し手と聞き手の両者を意識していたからではないだろうか。「自分」が「おまえ」という意味で使われるのも，「自分」という表現そのものが，既に相手に対する意識を含んでいるからだと思われる。

一般的には，聞き手を表す「君＝You」は，話し手である「私＝I」が意識する他者であって，「私」と「君」は，それぞれ別の人格を表すと暗黙の

うちに了解されている。しかし，「自分」や「おまえ」などの人称が，もともと話し手と聞き手の両者を意識の中に含んでしまっているとしたら，人称の認識が発生する心理学的諸条件を検討することで，このような暗黙の了解が妥当であるかどうかを再考してみる必要があるだろうか。

ここで，議論の煩雑さを回避するために，太郎と花子の二人に登場してもらうことにする。太郎が「わたし」と言っているときには，もちろん太郎自身を表している。そして，太郎が「あなた」と呼んでいるときは，花子を表している。他方，花子が「わたし」と言っているときには，花子自身を表している。花子が「あなた」と呼んでいるときは，太郎を表している。ならば，「わたし」とは，太郎でもあり花子でもあり，「あなた」とは，太郎でもあり花子でもある。もっと精確に言い直すと，「わたし」である人も，「あなた」である人も，結局は，誰でも良いのである。誰でも良いということは，「わたし」も「あなた」も，特定の誰かを具体的に指し示しているのではないということになる。だから，不特定の誰かが「わたし」であり，不特定の誰かが「あなた」である。

不特定ということは，もちろん不確定ということではない。太郎と花子がコミュニケーションしている対人場面では，太郎が「わたし」と言えば，必然的に「あなた」は花子として特定される。逆に，花子が「わたし」と言えば，必然的に「あなた」は太郎として特定されてしまう。太郎と花子の二者関係では，太郎は，本来は「わたし」でもなければ「あなた」でもないのだが，太郎がみずから話し手として表現するときに限って，「わたし」が太郎であり，「あなた」が花子であることがおのずから現れてくる。この事情は，花子にとっても同じである。花子にとっての「わたし」とは，太郎との二者関係を媒体として，みずから自分を表すことであり，「あなた」とは，おのずから自分が現れることである。

だとするならば，花子にとっての「自分」とは，太郎との二者関係を既に含んでいるのであって，二者関係を離れて自存する「花子」という個体的人物を，あるいは「太郎」という個体的人物を表しているのではないと理解し

なければならない。しかも，誰かとの二者関係にあるかぎり，花子だけでなく，太郎にも，次郎にも，三郎にも，誰にとっても，「自分」ということが妥当するのである。ならば，なおさらのこと，ある人物が個体として存在することが，「自分」ということではないと理解できる。

このような省察に基づいて，誰かにとっての「自分」とは，他の誰かとの二者関係にあることを基盤として，自分を「みずから表す」ことと，自分が「おのずから現れる」ことの統一態であると定義することができる。言い換えると，「自分」ということは，話し手と聞き手が二者関係にある函数的事態そのものであって，あるときは話し手としての自分を表し，あるときは聞き手としての自分が現れることである。だから，「私」あるいは「君」と指し示している「個的存在＝モノ」が自分なのではなく，まして，「君」と称せられている個的存在が自分なのではない。「自分」ということは，二者が対人場面に関与しない限り，実現することのない「事態＝コト」そのものなのである。二者が能動的に関与しあうことで初めて，その事態が，おのずから相手から分け与えられ，その事態を，みずから相手に分け与えることができるのである。しかも，おのずから現れてきて，みずから表してゆく事態の成り行きは，この「私」に固有な出来事ではなく，そのつど相手に応じて変化する出来事である。だから，「自分」とは，例えば自己同一性などの諸概念が表現しているような「本質的存在＝モノ」としての「私」，つまり理念的に象徴化された「私」でもない。

「自分」とは，個的あるいは本質的と規定しようと，存在性そのものの表現ではなく，二者間の関係が成り行く事態の現れ方であり表し方である。つまり，あるときには事態を「おのずからの現れ」と意味づけ，あるときには事態を「みずからの表し」と意味づける意識作用の可能態であり，そのつど差異が発生する出来事である。だから，「自分」ということにおいて意識される「二者」を，二人の実体的に自存する個的存在という意味で了解してはならない。個的存在は，話し手と聞き手とが循環してゆく事態で，話し手と聞き手の差異を発生させる「契機」としてのみ，自己の存在性を発揮できる

だけであって，主体あるいは客体として，それぞれに独自な作用を発揮する実体ではない。なぜなら，話し手も聞き手も特定の人ではなく，誰でも良い不特定の人であるからである。

同じく，話し手に対して，聞き手が外部に存在しなければならないと想定する必要もない。内部と外部を分けることそのものが，主体と客体が独立に自存していると仮想して，それぞれに独自な自律的機能性を付与する発想に由来している。しかし，話し手と聞き手が循環しながら双方的に再帰してゆく事態にある当事者にとっては，当事者の内と外ということ自体が意識化されることはないのである。このような当事者にとって，内と外ということが意識されるとしたら，それは恐らく，個的存在者としての内部と外部ではなく，事態の内部と外部を意識することが発端になるのではないだろうか。

英語の第２人称単数の you が，複数的意識をともなっているのもまた，恐らく，この意味での「自分」を発生させる事態を表現しているからではないかと思われる。ならば，you が意識している複数の人たちは，特定の人物と人物ではなく，みずから自分を表し，おのずから自分が現れる事態が発生する契機となる「誰か」であるはずである。だから，第２人称単数の you は，一方で複数的意識を孕みながらも，他方で単数として扱われるのであろう。このことは，「自分」という表現が，一方で自分の現れ方を意味し，他方で自分の表し方を意味しながらも，両者の統一態を表現する単数として扱われることと同じである。

通念的には第１人称である「自分」と，第２人称である「you」を結びつけることは，まことに奇想天外な発想であると思えてならない。しかし，以上の議論の筋道からして，必然的に「自分＝you」であると帰結せざるをえないのである。たとえ常識に反した帰結を導こうとも，そのように論理を展開させてみることで，新たな認識の局面を，どのように開拓できるかどうかこそが，真の試金石なのである。

## ［３］「私」というモノの発生源としての三者関係

英語の第２人称単数のyouは，一方で，話し手と聞き手の二者が関係するという複数の意識をともないながら，他方で，その二者が関係する事態が統一的に意識されていることを表す。この意味で，「you＝自分」である。それにしても，その統一的事態を，英語が聞き手に引きつけて表現するのに対して，日本語が話し手に引きつけて表現するのは，両者の発想法の根幹に触れる何かを暗示しているのではないかと予感される。

この問題は，とりあえずは脇に置いておく。ここでは，「you＝自分」として表現されるような全一的事態こそが，「私＝Ｉ」である主体性と，「君＝You」である客体性とが分化するための源泉であることを，英語の第２人称複数の意味用法を手がかりにして，さらに省察を進めてゆこう。

ここで，以降の議論の混乱を回避するために，「自分」が発生する契機となる第２人称の単数をyouと表し，第２人称の複数をYOU と表すことにする。そして，ＹＯＵを，WEあるいはTHEYと意味づけようとするIによって，ＹＯＵが一人の聞き手として意味づけられたときには，Youと表すことにする。このように表記法を区別するのは，ここで，「私＝Ｉ」を発生させる条件関係を考察しようと意図しているからである。

対人場面が二者関係から三者関係へと拡大するにつれて，「自分」を発生させる契機となるyouの存在性が気になってゆく。その結果として，まずは，当事者の意識の中で「youでない私＝Ｉ」が分化して，引き続いて，「Ｉでない君＝You」が分化してゆくのではないだろうか。

このような人称認識の発生の筋道を見えやすくするために，太郎と花子に加えて，幸子にも登場してもらおう。太郎と花子の二者関係では，太郎が「わたし」と表せば，花子が「あなた」として特定される。ところが，太郎と花子と幸子の三者関係では，太郎が「わたし」と表すだけでは，花子と幸子のどちらが「あなた」なのか不確定である。だから，太郎はそのつど，「『幸子でない花子が』私にとっての君である」のように，相手を指し示すことによって，「あなた」である誰かを「君」として確定しなければならない。太

郎によって，「花子が君である」と肯定的に確定されたときには，同時に，「幸子は君でない」と否定的に確定されているのである。

このような確定の作業が，否定を媒介とする肯定の陳述であることは，まことに注目に値する。肯定とは，「ほかならぬＸ」という否定によって裏打ちされた，「Ｘである」という肯定的判断を開陳することなのである。「ほかならぬＸ」ということは，「『Ｘでない』ものではない」という，二重否定による肯定を表す。だから，第２人称複数形のＹＯＵとは，この視点から言い換えると，いつも肯定あるいは否定される運命にある「誰か」なのである。そして，ＹＯＵである誰かを肯定したり，否定したりすることができるという意識が，「『ほかならぬ私』である私」という二重否定を媒介とした肯定性の強調によって裏付けされて，「私＝Ｉ」の主体性として意味づけられてゆくのだろう。対比してみると，「自分＝ you」の意識は「『誰でも良い誰か』である私」と表現できるが，自分の意識には，二重否定が含まれていないことに注目しておかなければならない。

「ほかならぬ私である」という意識は，「ＹＯＵでないＩ」という否定を媒介とする，「Ｉである」という肯定の意識である。「ＹＯＵでない」と否定すること，つまり「Ｉである」と肯定することは，自分が表現される事態を，肯定的判断と否定的判断の担い手としての主体性に帰属することである。だから，肯定されたＹＯＵは，判断主体であるＩにとってのＷＥとして，つまり，「君は私にとって私たち（仲間）である」と肯定的に意味づけられた人物である。ただし，仲間であると言っても，対等な関係を意味するのではなく，あくまでも，Ｉに従属する人のことであり，Ｉとしての主体的優位性を発揮できる相手のことである。ということは，相手に客体的劣位性を帰属することであるから，相手を肯定的に意味づけている背景に，相手に対する否定的な意味づけを既に孕んでいることになる。

他方で，否定されたＹＯＵは，判断主体であるＩにとってのＴＨＥＹとして，つまり，「君は私にとって私たち（仲間）ではない」と否定的に意味づけられる人物である。相手を否定するということは，結局は，Ｉとしての主体的

優位性を発揮できない相手であることを意味している。だから，相手を否定的に意味づけている背景に，自分が成り行かない事態への否定的な意味づけを既に孕んでいることになる。否定的な事態であるからこそ，その契機となる相手を対立的に否定しようとするのであろう。

YOUをWEとして肯定することも，YOUをTHEYとして否定することも，既に，「自分＝you」であることに対する否定的な意識を孕んでいるのである。このことは，二重否定によって，Iであることの肯定性を強調する構制になっていることと無縁なことではないだろう。なぜなら，主体性の強調に自縛されるほど，今ここでの事態を，強く否定しなければならない羽目に陥ってゆくからである。

繰り返すが，第2人称単数形のyouは，二者関係を結ぶことができる不特定の誰かであり，「わたし」にも「あなた」にもなりうる誰かである。だから，もし一方が「わたし」としてみずからを表せば，他方は「あなた」としておのずから特定されてしまうのである。ところが，第2人称複数形のYOUは，三者（以上の）関係を結ぶことができる不確定の誰かである。だから，ほかでもない「この私」によって，「私たちである＝WE」または「私たちでない＝THEY」と確定化されてしまうのである。「わたし」にとっての「あなた」は，双方的に規定しあう「事態＝コト」を実現する契機である。しかし，「この私＝I」にとっての「君たち＝YOU」あるいは「君＝You」は，Iによって，WEまたはTHEYのどちらかに一方的に分類されてしまう「人物・事物＝モノ」である。

ここまで来れば，英語の第2人称が単複同形であることの謎を解くことができただけでなく，Iが，なぜ常に大文字で書かれるのかも理解できよう。Iと表記するのは，他者を一方的に規定できる「主体性」を特別視しているからだろう。主体性とは，一方的であるがゆえに，まさに「主観」なのである。そして，ある誰かをTHEYとして判断するWEが多数であるほど，Iの主観的一方性が，WEの判断として「客体性」を帯びてくる。客体性とは，Iの一方性を，WEの多数性によって相殺する共同主観的な「客観」にほか

ならない。そうならば，主観と客観が，あたかも独立的に自存しているかのように見なすことは，ほかならない「この私」の主体的判断によって，「私たちであるモノ」と「私たちでないモノ」を区分けすることができるとする，唯我的な確信に根拠を置く措定であると認定できるだろう。

問題は，その認定の根拠に対して，どれほどの権利を与えることができるかどうかである。一方的である主観性を，煎じつめれば多数決的であるにすぎない共同主観性によって権利づけてみても，やはり，一方的であることには変わりはない。主観と客観，あるいは主体と客体が，独立して自存するという了解は，一方的に「見なす」ことと，一方的に「見なされる」こととの対人的な対立関係を反映しているのではないだろうか。つまり，一方的に見なされることを恐れて，一方的に見なし返そうとする心理的機制が介在することで，主観と客観が対立的に自存視されるのではないだろうか。だとするならば，何が，誰によって，どのように既に「見なす／見なされる」と錯認しているかを考察しなければならない。

## ［４］反照的意識と自我意識

「この私＝Ｉ」が，「私たち＝ＷＥ」と「彼ら＝ＴＨＥＹ」とに一方的に区分けできると意識するとき，この私を，一方的に「ＷＥである」あるいは「ＷＥでない」と区分け返してくる相手を意識させられることになる。このような反照的な意識の発生は，「わたし」と「あなた」とが，双方的に規定しあう事態を基盤としていると思われる。なぜなら，ほかならぬものとしての「この私」が絶対的であるのならば，反照的な意識などは発生するはずもないからである。「反照的意識」とは，他者を一方的にＷＥ／ＴＨＥＹとして見なすことと，他者によって一方的にＷＥ／ＴＨＥＹとして見なされることとの統一態である。Ｉとしての主体性は，否定的に肯定する反照的意識が発生させる対立的パターンの表現である。

「この私」を表すとき，英語表現では，常にＩを押し出そうとする。この傾向性は，主体としての等質性を確保しようとするあまり，あえて反照的意

識を排除する共同主観的な一方性を表しているのだろう。他方，日本語では，「この私」を表す適切な表現が見当たらない。例えば「私」という単語は，欧米語の第１人称単数に当てはめた訳語が，一般的に定着しただけである。公的に対する私的という意味が本来である「私」という表現では，「この私＝Ｉ」と主体性を押し出すことと，今でもなお馴染みきれていないところがある。いろいろと考えてみたが，「この私」という意味に合致する日本語の表現としては，「朕」ぐらいしか思いつかない。面白いことに，「朕」という呼称は，絶対的な権力者が，劣位者である「汝」に向かって意見・命令を述べるときに使われる。「朕」である絶対的優位者は，Ｉと表現する「この私」と同様に，相手からの見なし返しを反照的に意識する必要などないのである。ただ，朕の思うところを述べれば済む。他方，絶対的劣位者は，優位な相手に対しては「御前に」などと，謙譲的に「この私」を表現すれば済ませられるのも面白い。対等な相手に対しては，「我／吾」という表現が思いつくが，相手を見下して表す用法もあることからすると，「この私」よりは，むしろ「自分」に近い意味だと考えておくほうが良いだろう。どうやら日本語は，欧米語における主語的主体であるＩを表す適切な表現を欠いているようである。主語的な主体性を表現する必要もなかったのかもしれないが，主語的な主体性を表現することがタブーであったと考えられる。このような日本語表現の特徴に，相手からの反照的な意識を絶えず気にしなければならない心理的機制が反映されているはずである。

英語のYes／Noは，肯定疑問文であれ，否定疑問文であれ，応答文が肯定であればYesで，否定であればNoで答えれば良い。要するに，「この私」の肯定・否定の判断を直接に表現すれば良い。ところが，日本語の「はい／いいえ」は，肯定疑問文を肯定するときは「はい」と，否定するときは「いいえ」と応じるが，否定疑問文を肯定するときは「いいえ」と，否定するときは「はい」と応じなければならない。肯定疑問文は，陳述内容の真偽の判定が主な関心事である。しかし，否定疑問文は，真偽の判定を求めているというよりも，相手の同意を求めているのであって，相手から承認されるか排

斥されるかどうかのほうに関心があるのである。だからなおさらのこと，質問者の立場が反照的に意識されるのであろう。

池上（1982）は，英語のように，ことさらに「この私」を表面化しようとする言語を「スル的言語」と呼び，日本語のように，できるだけ「この私」を埋没させようとする言語を「ナル的言語」と呼んでいる。土居（1975）が指摘するように，日本人にとっての「内」とは，反照的な意識によって満たされた「自分＝you」が成り行く身内のことである。「外」とは，身内でないことであり，気をつかわなくても済む人たちのことである。日本人にとっての「内／外」は，あくまでも，「自分」ということにかかわる事態の特性である。ところが，欧米人にとっての「内／外」ということは，人格的な特性として想定されるのが常である。例えば，ロッター（Rotter，1966）による内的制御型（internal control）と外的制御型（external control）の区別は，要するに，「この私」の主体性を発揮できるかどうかの問題である。積極的で能動的ならば内的制御型の「私」で，消積的で受動的ならば外的制御型の「私」である。しかも，ただ人格的型を区別しているだけでなく，明らかに内的制御型の「私」のほうが望ましいと価値づけされているのである。

ことさらに「この私」を強調しなければならないということは，同時に，「この私」が適応しなければならない環境世界が，能動的な人格的主体性を発揮することを強く求める社会であることを意味している。だから，無理をしてでも反照的意識を抑圧して，積極的に自己主張しなければならない。土居によれば，「受身的希求」としての甘えということに対して，西洋人は奇妙なほどに鈍感であるという。滝浦（1990）によれば，西洋哲学の伝統では，不思議なほどに他者の存在性が無視されてきたという。このようなことがまた，主体性の過度の強調と呼応している。「この私」が一方的であり続けるためには，他者を媒介として，おのずから現れる反照的な意識を無視しなければならない宿命にあるのである。

ここで，本論の初めで，「自我」は構造的側面を強調する概念であり，「自

己」は過程的側面を強調する概念だと考えられていると指摘しておいたことを想起してみよう。「構造」と言われれば，そして，「過程」と言われれば，それだけで，何かが分かったつもりになる。しかし，あらためて，構造とは何であり，過程とは何であるかと問い直すために諸理論にあたってみても，どうも判然としないことが多い。だから，自我の意味を考察するためには，まず，構造という概念に含まれる基本的な意味と用法を分析しておかなければならない。

現代的な意味での「構造」という概念は，どうやらソシュールによる言語理論に端を発しているらしい（立川・山田，1990）。構造を論ずる諸理論に共通する側面を抽出してみると，多くの場合，「～である」と肯定的に関係づけられる項と，「～でない」と否定的に関係づけられる項との統一態が意識されているようである。このことを見えやすくするために，例として「AはBであるが，AはCでない」という判断陳述を考えてみる。すると，［Aである［Bである［Cでない］］］のように，入れ子的な関係態を抽出することができる。「A：B：C」という項を複合的に関係づける背景に，いつも，入れ子的に重層的な関係態を想定することができるという認識が，構造という概念の基本的な意味用法を特徴づけているようである。そこで，「構造」とは，肯定と否定との機能的な統一態であり，複合的かつ重層的な関係態として表現されることであると認識しておこう。

次に，土居（1965）に典拠して，「エス・自我・超自我」の3項によって構成されているフロイト（Freud）の自我構造論を見直してみよう。エス（es）は，自我（ego）に属さない無意識的な本能である。自我は，意識であり，外界へと適応する現実的な営みである。超自我（super-ego）は，本能的欲求を禁止する社会的な制約である。自我意識とは，社会的制約を意識しながら現実的に行動を制御することであるから，フロイトの自我構造は，［超自我である［自我である［エスでない］］］のように，既に認識した「構造」の意味用法と合致して，肯定と否定との機能的な統一態を表現していると理解できるのである。さらに，フロイトの「自我」という概念を積極的に

意味づけているのは，「自我は超自我に含まれる」という肯定性ではなくて，「自我はエスではない」という否定性であることを想起すれば，「自我」という概念が，これまで論じてきた意味での「この私＝Ｉ」を表現していると理解することができる。

だとするならば，「自我意識」とは，ＩがＹＯＵを一方的にＷＥあるいはＴＨＥＹとして区分けしようとするときに，ＩもまたＷＥあるいはＴＨＥＹとして区分け返されることへの恐れをともなった反照的意識であると了解することができる。仕返しを恐れるほどに，一方的である「この私」を，「ＩにとってのＷＥ」によって強化しようとするのであろう。この意味でのＷＥは，ＴＨＥＹに対抗するための道具的存在でしかない。要するに，Ｉとしての主体性を発揮できる限りでのＷＥであり，Ｉとしての主体性を疎外するときには，ただちにＴＨＥＹとして見なされてしまう運命にある客体なのである。

このような視点から見直してみると，「主体的である」ということは，他者に対して一方的であり，権力的である徴候を表すと同時に，自己疎外的である。そして，自己分裂的な徴候が現れることである。なぜなら，主体性の発揮は，原理的に，双方的な事態の否定を媒介として実現することであるからである。欧米人の精神性は，善を追求するあまり悪にとらわれてしまうとユング（Jung，1963）が指摘していること，そして，影による補償作用とか両性具有などの概念によって心的機能の相補性を指摘していることは，このような事情を表しているのだろう。

## ［５］ヒト的対象性とモノ的対象性

土居（1975）によれば，「甘え」は受身的希求であると定義されるが，「受身的」という語感が，日常的に体験される甘えの現象に，なんとなくそぐわない感じがしてならない。恐らく，受動的ということが，能動的ということと対比されて，「能動的でない」という否定性を強く意識させて，どことなく弱々しい消極的な感じを与えてしまうからであろう。しかし，あえて他者に甘えることができるということは，木村（1973）も指摘しているよ

うに，消極的であるどころか，かえって積極的なたくましさを感じさせるのである。そのうえ，土居自身が指摘しているように，幼児期に甘えの体験を欠くことが，後の人格的発達に重大な障害をもたらしうるのだとしたら，その障害を正しく認識するためにも，甘えの現象を，肯定的かつ積極的に意義づける視点を探究する必要があるように思う。

言うまでもなく，赤ちゃんは，甘えに浸りきっている最たる存在である。だから，「この私」という視点から見ると，赤ちゃんは，いかにも弱々しく受動的に見える存在である。しかし，赤ちゃんとお母さんのかかわりあいに関する最近の諸データを見ると（小此木・渡辺，1989；鯨岡，1989），赤ちゃんが，おのずから現れる事態に対して，みずから積極的に関与していることを再認識しなければならない。とりわけ，エントレインメントと呼ばれる赤ちゃんとお母さんの同調現象は，「おのずから／みずから」の統一態として，赤ちゃんが既に存在していることを雄弁に物語ってくれる。このことを裏返して言い換えれば，赤ちゃんは，他者の代表であるお母さんとのかかわりあいの中で，おのずから現れる成り行きに支えられて，みずからを表すことができるようになると再認識することができるのである。

素直に考えてみれば，まことに当たり前なことであるのに，これまでの発達心理学的認識では，不思議なくらいに，お母さんが赤ちゃんにかかわることの意義が等閑視されてきたように思う。たいていは，能動的主体としての赤ちゃんを強調するか，受動的客体としての赤ちゃんを強調するだけで，両者を統一的事態として認識する試みは少ない。心理学的現象の基本的意義は，人と人が相補的にかかわりあうコンテクストに支えられて，人が人に再帰的にかかわることにある。にもかかわらず心理学には，おのずから成り行く相補的かつ再帰的なコンテクストを捨象して，みずから成り行かせる主体的作用に還元して，現象を説明しようとする強い傾向がある。しかし，主体性を初めから前提としている限り，金太郎飴的な認識の範囲を出ることができない。つまり，主体であることの認識が，どのような経緯をたどって発生するのか，適切に理解することができなくなってしまう。

ここでは，赤ちゃんが，「この私」として存在する以前に，既に「自分」として存在していることを正当に再認識しながら，相補的かつ再帰的に実現する「自分」を基盤として，「この私」の認識が発生する構制を省察してみようと思う。この目的のために，ハイダー（Heider，1958）が人的因果性（personal causality）と非人的因果性（impersonal causality）を区別した視点に着目してみよう。人的因果性とは，多様な手段にもかかわらず，同じ結果が招来する因果的な出来事の認知である。そして，非人的因果性とは，異なる手段に対応して，異なる結果が招来する因果的な出来事の認知である。つまり，結果として招来された出来事の類同性を再認することが人的な因果性の認知で，結果を招来する出来事の類同性を再認することが非人的な因果性の認知である。だから，非人的な因果性では，出来事の原因として意識された作用体が強調される。他方，結果を強調する人的な因果性では，出来事の成り行きの成否が意識される。

廣松（1988）は，主体として個物的または本質的であるモノ（事物）が，客体として個物的または本質的であるモノ（事物）が，独立自存しているのではないと主張する。そして，主体的として錯認されうるコト（事態）が，客体的として錯認されうるコト（事態）があるだけであると指摘してくれている。それでは，どのような事態が関与することで，主体または客体として対象性が錯認されるのだろうか。このことを考察するためにも，まずは，「ヒト的対象性」が実現する人的で因果的な事態と，「モノ的対象性」が実現する非人的で因果的な事態との差異を，とりあえず，仮説的に分析してみなければならない。

そこで，事態の差異を表現する当事者Pを，赤ちゃんに仮託してみよう。そして，赤ちゃんにとってのお母さんを，ヒト的対象性を表現する人物Oと見なし，モノ的対象性を表現する事物Xと区別して，PがOとXのそれぞれにかかわる事態の因果的な差異を仮説的に分析してみる。このような分析を試みるにあたって，心理学の実験と観察に基づく諸データの含意を念頭に置いておくが，とりわけ，やまだ（1987）による事例研究の含意と，その啓発的な

所論を手がかりにする。それは，心理学者でもあるお母さんが，自身の赤ちゃんにかかわりながら通時的に観察した事例研究で，日常茶飯事の細やかな「やりーとり」が組織的に記述されている。第3者である研究者が記述したデータや，都合の良いときに接触するだけのお父さんが記述したデータでは，当事者としての細やかな配慮の仕方について，日常的なコンテクストの展開の仕方についてなど，えてして肝心なところの記述が脱落してしまいがちである。この意味で，やまだのデータは貴重であり，みずからの実践的なかかわりを媒介として，おのずからの成り行きを見とどけたうえでの立論は傾聴に値する。

次の仮説1では，このような視点から，対象性の現れ方および表し方を分析してみる。ⓐ項では，ヒト的に現れる因果性を表現し，ⓑ項では，モノ的に現れる因果性を表現している。両者を比較して，その差異を読み取っていただきたい。なお，＊印を付して，関連する注釈を添えておく。

**仮説1**　当事者P（赤ちゃん）にとって，人物O（お母さん）と事物Xが表現する対象性の差異の分析

**①　対象として現れる方向性の分析**

ⓐ　PのところにOが来てくれる。

1. Pがココにいれば，Oはアソコからココに来てくれる。
   ＊例えば，赤ちゃんが泣けば，お母さんが赤ちゃんのところに来て，世話をしてくれる。
2. そのとき，Pがいるココと，Oが来てくれたココは，PとOが共に存在することを可能にする統一態として現れる。
3. PとOがココで共存する事態は，Pにとって，オノズカラ現れる自分の出来事である。
4. PにとってのOは，自分にとっての出来事が，オノズカラ現れる契機としての「あなた」である。
5. 自分がオノズカラ現れてくる肯定的な事態を媒介として，そこに現

れてくる「あなた」の道具的有効性と，「あなた」にとっての自分の現れ方を覚知する。

＊「覚知」とは，事態の意味がオノズカラ現れることであり，意識的に身構えなくても，事態の成り行きが自分の出来事として了解されることである。一方，「知覚」とは，事態の意味をミズカラ表すことで，意識的な身構えによって事態を意味づけることである。そして，「自覚」とは，意味づけに応じて，意識的に身構え直すことができることである。

ⓑ Ｘのところに Ｐが行かなければならない。

1. Ｘがアソコにあるとき，Ｐは，ココから出て，アソコに向かって行かなければならない。

＊例えば，ガラガラが欲しいときには，ガラガラがある場所に向けて，手を伸ばさなければならない。

2. そのとき，Ｘがあるアソコと，Ｐがいるココは，ＰとＸが別に存在することを可能にする分裂態として現れる。
3. ＰとＸがココとアソコに別存する事態は，Ｐにとって，ミズカラ表さなければならない自分の出来事である。
4. ＰにとってのＸは，ミズカラ表さなければ，自分にとっての出来事とはならない「それ」であり，ミズカラ表すことの契機である。
5. ミズカラ表さなければ自分の出来事とはならない否定的可能性と，ミズカラ表せば自分の出来事になる肯定的可能性を媒介として，ミズカラ表すこととオノズカラ現れることの因果性を覚知する。

**② 対象として表す媒体性の分析**

ⓐ Ｐが要求するとき，ＯがＸを適切に処理してくれる。

1. Ｐにとって，Ｏは呪術的操作の対象である。

＊「呪術的」とは，他者の操作能力をあてにして，当事者にとって望ましい結果を招来させることである。

＊スキナー（Skinner, 1957）の概念であるマンド（mand）の含意

を翻案して呪術的操作と呼び，タクト（tact）の含意を翻案して工作的操作と呼ぶことにする。

2. Pにとって肯定的な結果を招来した原因は，

a．OがPの呪術的要求を適切に認知できたこと，

b　および，OがXを適切に工作できたことである。

3. Pにとって否定的な結果を招来した原因は，

a．OがPの呪術的要求を適切に認知できなかったこと，

b．または，OがXを適切に工作できなかったことである。

4. Pの呪術的要求に対処するために，どのようなXが媒体となろうとも，その結果が，Pにとって望ましいものでありさえすれば，Xの媒体性を問わずに事態が覚知される。

5. だから，PにとってのOは，Pの呪術的要求を適切に認知して，Xを適切に処理できる馴染みの人でなければならない。

＊因果的双方性が円滑に機能するほど十分に馴染んでいれば，相手に合わせて，そのつど身構え直す心的負荷が減少する。なぜなら，馴染みの人であるほど，人的な事態の成り行きを見通すことができるからである。そして，馴染みがない人ほど，呪術性を抑圧する心的負荷が増大する。

ⓑ　Pが要求するとき，PはXを適切に処理しなければならない。

1. Pにとって，Xは工作的操作の対象である。

＊「工作的」とは，当事者の操作能力を発揮して，当事者にとって望ましい結果を招来させることである。

2. Pにとって肯定的な結果を招来した原因は，

a．PがXの特性を適切に認知できたこと，

b．および，PがXを適切に工作できたことである。

3. Pにとって否定的な結果を招来した原因は，

a．PがXの特性を適切に認知できなかったこと，

b．または，PがXを適切に工作できなかったことである。

4. ＰはＸの特性を適切に認知して，適切に操作しなければならない。だから，Ｐが適切に扱えるときＸの媒体性が覚知され，適切に扱えないときにはＸの媒体性が覚知されない。
5. だから，ＰにとってのＸは，適切に操作できるものでなければならない。同時に，Ｐの関心を引きつけるほどに適度な新奇性を備えていなければならない。
   ＊因果的一方性が円滑に機能するほど十分に馴染んでいれば，いつもどおりの操作をすることへの心的飽和が増大する。つまり，操作対象としての目新しさがなくなる。

仮説１では，当事者Ｐを赤ちゃんに仮託して，ヒト的対象性Ｏとモノ的対象性Ｘを分析してみた。要約すると，ＰにとってのＯ（お母さん）は呪術的な操作の対象として覚知され，ＰとＯが相互に馴染みあうほど，事態に対して身構えなければならない心的負荷が減少する。その結果として，ますます安心して，Ｐは，Ｏに対して呪術的主体性を発揮できるようになる。他方，ＰにとってのＸは工作的に操作しなければならない対象として覚知され，ＰがＸに馴染むほど，いつもどおりの事態に対する心的飽和が増大する。その結果として，Ｐの工作的主体性を発揮できるような新奇なＸを捜し求めるようになる。呪術的であれ，工作的であれ，みずから主体性を発揮することには変わりはない。しかし，工作的主体性を発揮するほど，モノ的対象性は一義化してゆくが，呪術的主体性を発揮しても，必ずしもヒト的対象性は一義化してゆくとは限らないことが問題なのである。

ハイダーは，結果の等終局性（equifinality）によってヒト的因果性を，結果の多重終局性（mulitifinality）によってモノ的因果性を特徴づけている。しかし，主体性の認識の発生という観点からすると，むしろ，事態の工作的一義化によってモノ的因果性を特徴づけて，事態の呪術的一義化によってヒト的因果性を特徴づけたほうが良いように思う。なぜなら，主体性の発揮を促す事態性と，主体性が発揮される方向性が見えやすくなるからであ

る。つまり，一方で，事態が一義化してゆくほど心的に過飽和になることに抵抗して，事態を適度に多義化しようとする主体的表現の外向性を読み取ることができる。これは，好奇心とか，内発的動機づけなどと呼ばれている現象に相当する。他方で，事態が多義化してゆくほど心的に過負荷になることに抵抗して，事態を適度に一義化しようとする主体的表現の内向性を読み取ることができる。だから，外向的な多義化は工作的主体性を表すことであり，内向的な一義化は呪術的主体性が現れることである。

一般に，馴染みのない事態に立ち向かおうとする外向的主体性を，能動的であるとか，積極的であるなどと高く価値づける。そして，馴染んだ事態に立ち戻ろうとする内向的主体性を，受動的であるとか，消極的であるなどと低く価値づける傾向がある。しかし，心的過飽和を緩衝するために工作的になるのであり，心的過負荷を緩衝するために呪術的になるのである。だから，心的過飽和を工作的に緩衝できなかったときには，呪術的に他力をあてにするしかない。他方，心的過負荷を呪術的に緩衝できなかったときには，工作的に自力で立ち向かうほかない。この意味で，外向的主体性と内向的主体性は，相補的な統一態としての「自分」の表現なのである。

事態が一義化するほど心的飽和が増大し，事態が多義化するほど心的負荷が増大する。だから，事態が過度に一義化あるいは多義化することが，生命活動の停滞を招く真の原因なのである。なぜなら，事態が過度に一義化してゆくほど，成り行く先が見えた事態に縛られてしまい，自分を表しようもないほどに，自分が無力化してゆく「不安」を意識するからである。他方，事態が過度に多義化してゆくほど，成り行く先が見えない事態に投げこまれてしまい，自分が現れようもないほどに，自分が無力化してゆく「恐怖」を意識するからである。だから，生命活動の実現と維持という観点から見るならば，能動的主体性と受動的主体性を分裂させて，どちらかを高く価値づけてしまう錯認の構制こそが，むしろ大きな問題を孕むのである。

この視点から見ると，生命活動とは，事態の一義化と多義化が過度にならないように，適度な心的緊張と心的弛緩とが適時に反復して，適切に同期で

きるリズムあるいはサイクルをパターン化してゆくことであると認識することができる。ウォーコップ（Wauchope，1948）の「A／Bパターン」と，その含意を拡張した安永（1987）に典拠して言い換えれば，生命活動とは，おのずから自分が現れる内向的事態と，みずから自分を表す外向的事態との統一態であって，「おのずから／みずから」のパターンとして表現することができるだろう。「パターン」とは差異であり，統一態でありながらも，あるときには内向的主体性として自分が現れることと，あるときには外向的主体性として自分を表すこととの相補的関係を，統一的に認識するための概念である。

そこで，これまでの議論を根拠にして，そして，これからの議論を先取りするために，内向的主体性として現れる自分の出来事の覚知を「自己」と定義して，外向的主体性として表す自分の出来事の知覚を「自我」と定義してみる。すると，「自分」とは，自己覚知あるいは自我知覚のパターンによって，事態のコンテクストを意味づける再帰的な統一態として定義することができる。「再帰的」とは，覚知され知覚された事態のコンテクストによって，意味づけている自分が自覚されることである。

さて，仮説1で当事者Pを赤ちゃんに仮託したのは，おのずからPに覚知される事態の対象性を，つまり，自分の自己性を発生させる条件を分析するためであった。このような仮説的な分析によって，赤ちゃんにとっての事態というものが，赤ちゃん自身が工作的に関与する側面を含みつつも，基本的には，工作的に関与するお母さんを媒体とする呪術的様相を帯びた事態であることを再認識することができたのである。このことは，やまだの記述および立論と軌を一にしている。しかし残念ながら，お母さんであるやまだ自身が，どのように赤ちゃんを知覚しているかについては，ほとんど記述してくれていない。そして，赤ちゃんの知覚が，お母さんとしての自覚をどのように媒介しているかについては，依然として秘められたままである。その弊を補うためにも，次の仮説2では，当事者Pをお母さんに仮託して，みずからPが知覚するヒト的対象性O（赤ちゃん）と，モノ的対象性Xを仮説的に分

析してみよう。つまり，自分の自我性を発生させる条件を分析してみよう。この仮説2でも，ⓐ項でヒト的対象性を分析し，ⓑ項でモノ的対象性を分析するが，両項を比較して，さらに仮説1と比較して，そこに表現されている差異を読み取っていただきたい。

**仮説2**　当事者P（お母さん）にとって，人物O（赤ちゃん）と事物Xが表現する対象性の差異の分析

**①　対象性が現れる方向の分析**

ⓐ　PはOのところに行かなければならない。

1. Oが存在しているアソコへとPが行くことによって，アソコがPを拘束するココになる。

＊例えば，赤ちゃんが泣けば，お母さんは赤ちゃんのところに行って，世話をしなければならない。

2. そのとき，PとOは，ココで共に存在する。
3. PとOが共存する事態は，Pにとって，ミズカラ表す自分の出来事であるが，その成り行きは必ずしも一義的ではない。
4. PにとってのOは，自分にとっての出来事をミズカラ表す契機になりうる「あなた」である。
5. 自分がミズカラ表すことの肯定性と，事態が必ずしも一義的には成り行かないという否定性を媒介として，オノズカラ現れてくる多義的なヒト的対象性を知覚する。

＊多義的に現れる赤ちゃんに対応できるようになるほど，母親としての有能性を知覚するとともに，この事態が自分のこととして自覚される。つまり，自分の工作的主体性を意識的に発揮できるようになる。

ⓑ　PはXのところに行かなければならない。

1. Xがアソコにあるとき，Pは，ココから出て，アソコに行かなければならない。しかし，PがXに関与しようとしないかぎり，アソコは

Pを拘束しない。

＊例えば，本屋の前を通りかかっても、本を求めるつもりがなければ，本屋の前を通り過ぎるだけである。

2. Xは，Pがいるココとは別のアソコに存在する。

3. PとXがココとアソコに別存する事態は，Pにとって，ミズカラ表すことができる自分の出来事である。

4. PにとってのXは，ミズカラ表しさえすれば，オノズカラ一義的に対象性が決定される「それ」である。

5. ミズカラの働きかけ方に応じて，オノズカラXの対象性が一義的に現れるという肯定性を媒介として，ミズカラ表したり，ミズカラ表さなかったりすることができるモノ的対象性を知覚する。

＊必要に応じて取り扱うことができるほど，工作的操作の対象となる存在性を客体として自覚する。

**② 対象性を表す媒体の分析**

ⓐ Pは，Oの要求に合わせて，Xを適切に処理しなければならない。

1. Pにとって，Oは工作的操作の対象である。

2. Oの要求に応じてOが工作的に対応しても，必ずしも，Pの思いどおりの結果になるとはかぎらない。つまり，望ましい結果が招来するかどうかは，Oによって大きく左右される。

3. 工作的に操作しているにもかかわらず，どうしても望ましい結果が現れないときでも，Pはココから離れることができない。つまり，PはOによって拘束される。だから，PはOの傍にいて，事態が好転することを呪術的に願うしかない。

4. どのようなXを媒体としてOに対処しようとも，その結果がPにとって望ましい限り，Xの媒体性は問題にならない。

5. だから，PにとってのOは，ただ要求に従うほかない優位的主体であり，Oの要求に適切に応じられるようになるほど，Oに従属した一体感を肯定的に自覚する。

＊因果的双方性が円滑に機能するほど十分に馴染みの人であるほど，そのつど身構える心理的負荷が減少して，呪術的にかかわりあうことができる。「イナイ・イナイ・バー」の遊びなどは，呪術的な相互依存によって一体感が招来する典型例である。

ⓑ　Ｐが要求するとき，ＰはＸを適切に処理しなければならない。

1. Ｐにとって，Ｘは工作的操作の対象である。
2. Ｐにとって肯定的あるいは否定的な結果は，
   a．ＰがＸの特性を適切に認知できたかどうか，
   b．および，ＰがＸを適切に工作できたかどうかによって決定される。
3. 工作的に操作しているにもかかわらず，どうしても望ましい結果が現れないときは，Ｐはアソコから離れることができる。つまり，ＰはＸに拘束されない。
4. ＰにとってのＸは，Ｐが工作的に対処できるものでなければならないので，Ｘの媒体性が問題になる。
5. だから，Ｐは，Ｘに対して工作的に関与できるときは有能的主体性を自覚し，工作的に関与できないときは無能的主体性を自覚する。そして，有能的主体性を自覚するほど工作的になり，無能的主体性を自覚するほど呪術的になる。

当事者Ｐを赤ちゃんに仮託した仮説１と，当事者Ｐをお母さんに仮託した仮説２を比べてみれば，両者におけるヒト的対象性とモノ的対象性の現れ方および表し方が微妙に異なることが了解できるだろう。赤ちゃんにとってのヒト的対象性が呪術的様相を帯びているのは，お母さんの工作的操作の適否によって事態が左右されるからである。しかし，事態の成り行きが肯定的であれ否定的であれ，赤ちゃんにとっては，その成り行き自体がおのずから実現する統一的な事態である。だから，赤ちゃんは，そのつどヒト的対象性を肯定的あるいは否定的のどちらかに一義化して覚知する。しかも，その一義的肯定性あるいは否定性を，自分自身の出来事として再帰的に覚知するので

ある。

このような認識は，ガントリップ（Guntrip, 1971）による対象関係論を想起させてくれる。ガントリップが，人を「パーソン」（person）と呼んでいるのは，ヒト的対象性を表現する他者が，「おのずから／みずから」の統一態としての自分を自覚させる契機になると想定しているからであろう。そして，「シゾイド」（schizoid）という概念は，赤ちゃんにおけるヒト的対象性が，肯定性と否定性のどちらかに，そのつど再帰的に一義化されてしまうことを意味しているのだろう。なお，ガントリップの背景には，英国のクライン学派が脈打っていることを指摘しておく（小此木，1985）。

お母さんにとって，赤ちゃんがヒト的対象であるが，その対象性は工作的に操作するモノ的色彩を帯びつつも，やはり，呪術的様相を帯びているのである。なぜなら，お母さんが赤ちゃんとともにココで共存することを願う限り，つまり，ココから離れることができない限り，既にココを規定している赤ちゃんによって拘束されてしまっている。なぜなら，ココで共存することの一体感を持つことができるかどうかは，実に，赤ちゃんしだいであるからである。このときのお母さんにとって，ヒト的対象性は，工作的主体性を発揮する自分よりは，呪術的主体性を発揮する赤ちゃんに従属する自分によって意味づけられている。

当事者がお母さんであるとき，外見的には，お母さん優位の工作的事態であるかのように見えても，お母さんの意識では，赤ちゃん優位の呪術的事態として意味づけられている。他方，当事者が赤ちゃんであるときは，外見的には，赤ちゃんが劣位の呪術的事態であるかのように見えても，赤ちゃんが覚知する事態は，赤ちゃん中心に成り行く事態である。このような矛盾に満ちたヒト的対象性の現れ方および表し方からすると，ヒト的対象性とは，呪術的優位性に巻き込まれて，あるいは巻き込んで，おのずからの成り行きを，みずからの成り行きとして捉え返すことによって実現するのではないかと考えるほかない。なぜなら，お母さんが赤ちゃんに従属するのは，おのずから否応なく現れてくる出来事というよりも，みずから好んで表してゆく出来事

として理解されなければならないからである。たとえ生物学的には母親であっても，赤ちゃんをモノ的に扱う限り，母親は，いつでもココから離れることができるのである。お母さんがココから離れることができないのは，赤ちゃんをヒト的に扱っているからにほかならない。

ここに至ってようやく，「おのずから／みずから」のパターンが，当事者の意識の中で，再帰的に反転する必然性を認識することができたのである。おのずから呪術性を表す赤ちゃんに対して，お母さんがみずから工作的に関与することによって，その成り行き自体を，おのずからの成り行きとして捉え返すことが，自分がお母さんであることの自覚へと至らしめるのではないだろうか。自覚は，みずからの営為を，おのずからの成り行きへと包摂して，おのずからの表しと意味づけることで，みずからの現れとして意味づけ直すことである。それは，「自分」を統一態として実践的に表現する自覚的決意である。つまり，「おのずから現れ／みずから表す」ことを，再帰的な「おのずから表し／みずから現れる」こととして受け入れることである。お母さんに限らず，お父さんも教師も，決意をともなった自覚を媒介として，この子だけでなく，等しく子どもたちの成長を素直に希い喜ぶことができるようになるのだろう。

先に，内向的主体性として現れる自分の出来事の覚知を「自己」と定義して，外向的主体性として表す自分の出来事の知覚を「自我」と定義した。そして，「自分」とは，自己覚知あるいは自我知覚のパターンによって，事態のコンテクストを意味づける再帰的な統一態として定義しておいた。しかし，自己の覚知という表現は少し不正確である。なぜなら，ほかならぬ自分こそが，この赤ちゃんにとってのお母さんであることを知覚しているお母さんは，内向的主体性として現れる自分を自覚しているのであって，ただ漠然と自分の現れ方を覚知しているのではないからである。しかも，おのずからの出来事を自分自身のこととして受け入れて，その成り行きに従っているだけであって，外向的主体性を表そうとしているわけではない。他方，赤ちゃんは，現れる出来事の成り行きを覚知しているだけであって，その意味を自覚して

いるわけではない。

お母さんのように，おのずからの出来事を自分自身のこととして自覚しているときに初めて，ウォーコップの「A／Bパターン」を当てはめて，その自覚的な自分を，「自己／自我」のパターンとして表現できるのである。このときの「自己」は，自我を包摂する統一的意識態であり，おのずから現れる成り行きを優位に置く点で，みずから表す成り行きを優位に置こうとするフロイト的な自我でもなければ，否定的に意識される無意識のエスでもないし，行動規範を提示する超自我でもない。ユングの用語で表現すれば，個性化（individuation）の現れである。

## ［6］所与と所識，および能知者と能識者

仮説1では当事者を赤ちゃんに仮託して，仮説2ではお母さんに仮託して対象性の現れ方と表し方を分析してみた。赤ちゃんは，お母さんに全面的に依存していて，お母さんは，赤ちゃんに全面的に拘束されている点で，ここで仮託した当事者は両極端であった。しかし，対人関係が成り行く事態は，基本的に依存しつつ拘束しあうことである。だから，両極端における対象性の現れ方と表し方を見ておきさえすれば，適宜，その間を補うことができるはずなので，必要に応じて補塡していただきたい。ここでは観点を変えて，これまで論じてきたことを見直すために，関連する諸理論が孕んでいる含意を対比的に読み取りながら，さらに認識を深めてゆこうと思う。

気になる論考がいくつもあるのだが，とりあえず，廣松（1988）による「所与」と「所識」，および「能知者」と「能識者」の概念を取り上げ，ソシュールによる「シニフィエ」（意味されるもの）と「シニフィアン」（意味するもの），および「通時態」と「共時態」の概念と対応づけて検討してみる。なお，ソシュールについては，丸山（1981）および立川（1986）と立川・山田（1990）で立川が執筆した項目に典拠する。

廣松によれば，所与とは，知覚的与件であり，所識とは，所与が「それ以上・以外のあるもの」として覚識されることである。例えば，机の上にある

「もの」（所与）が，「本」（所識）として覚識されたり，その「本」（所与）が，「彼の本」（所識）として覚識されることである。ソシュールの概念で言い換えると，所与である「もの」はシニフィエであり，所識である「本」はシニフィアンである。その「本」が「彼の本」を意味するものであり，その「本」は「彼の本」として意味されるものである。このような関係を考えてみれば，意味されるものである「所与＝シニフィエ」と，意味するものである「所識＝シニフィアン」は，相互に切り離すことができない「成態＝統一態」としてあることを理解することができるだろう。

図　1

図　2

このことを直感的に理解するために，まず上の図１を見ていただきたい。ただ黒い斑点が無意味に散在しているだけで，他には，何も見ることができないはずである。それでは，次頁の図３を見たうえで，改めて上の図１を見直してみていただきたい。今度は，何が見えるだろうか。

今度は，図１の中に「男の人」を見てしまったはずである。しかも，最初に見た「黒い斑点」を，もはや見ることができないはずである。どんなに見ようと試みても，二度と黒い斑点を見ることはできない。まことに不思議である。試みに，折にふれては，図1を見直してみるとよいだろう。やはり，男の人が見えてしまうのである。しかも，このことは，おのずからの出来事である。

「黒い斑点」と「男の人」との関係で考えると，最初に図１で見た黒い斑点が所与であり，図３を見た後に，図１で見てしまった男の人が所識である。

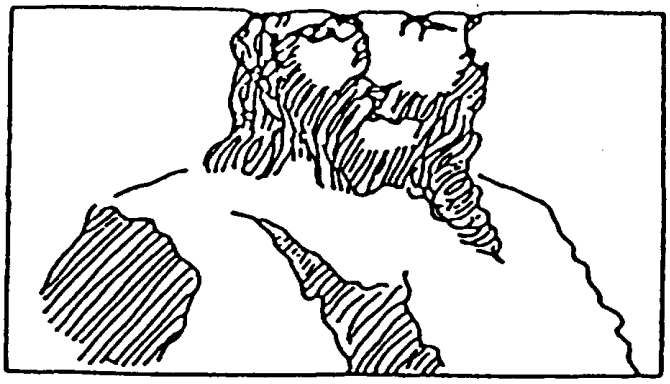

図　3

いったん図１に男の人を見てしまうと，二度と黒い斑点を見ることができないのだが，それでも，黒い斑点がそこにあったことは確かである。このことから，所与と所識が成態であるということを直感的に了解できるだろう。それでは，前の頁の図２を見ていただきたい。

図２は「若い婦人」に見えたはずだが，彼女のあごの部分を鼻と見なし，首のネックレスを口と見なすと「老婦人」が見えてくる。このことから，図２は，あるときは若い婦人が現れ，あるときには老婦人が現れることを可能にする統一態としてあると了解できるだろう。しかも，若い婦人を表すためには，老婦人の鼻を若い婦人のあごと見なし，老婦人を表すためには，若い婦人を老婦人の鼻と見なさなければならない。ということは，図２は，おのずから「若い婦人／老婦人」として現れる事態であると同時に，みずから「若い婦人／老婦人」として表す事態でもあると了解できるだろう。このような「おのずから／みずから」の事態としてあるとき，可能態としての図２そのものが所与であり，実現態としての若い婦人または老婦人が所識である。このような意味で，「自分」とは，話し手あるいは聞き手として「おのずから現れ／みずから表す」ことの可能態なのである。

廣松によれば，能知者とは，知覚する人であり，能識者とは，能知者が「それ以上・以外のあるもの」として覚識されることである。例えば，なぜ図３が「男の人」として認知されるかを考えてみよう。髪の毛が長いという特徴からすれば，「女の人」として認知されるはずである。昨今のように，髪型だけでは男女の区別がつかなくなったからこそ，徴候としての長い髪の毛は多義的であり，女の徴候でも男の徴候でもありうるのである。ただし，長い髪が多義的であると言っても，それは現代の風俗の問題であって，つい

二十年ほど前ならば，長い髪は女の徴候として一義的であった。他方，長い髭は，男の徴候として一義的である。つまり，女が長い髭をたくわえていることは，一義的にありえないことである。ただし，ありえないと言っても，今のところ言えることに過ぎないのかもしれない。乳房は女の生物学的徴候として一義的だが，今でも，胸をシリコンで膨らませる男がいるのだから，その風潮が一般化したときには，外見的徴候としての一義性を喪失することになるだろう。同じことで，女が髭をたくわえるようになる可能性もまた，全面的に否定することはできないのである。

図3で「男の人」を見て，図1に「男の人」を押しつけてしまうことの背景には，今のこの時代に通用する男性性を決定づける徴候を，女性性を決定づける徴候と対比させて，「『女でない』男である」のように，否定を媒介として肯定する構制が介在しているのである。肯定的あるいは否定的に判断する担い手は能知者であるが，判断の基準は，対象性を決定づける徴候を一義的と見なす多数決性によって与えられているのである。この多数決性を廣松は能識者と呼んでいるのだが，多数決である点において，能識者は，能知者「以上・以外のあるもの」なのである。その多数決性を，今のこの時代に「通用する」という意味で捉えると，ソシュールの共時態の概念に相当すると理解できる。

ところで，一般的に，その多数決性が通時代的に一貫しているという意味で通時態が理解されているようだが，すると，共時態との概念的な区別は，単に相対的な共時性の広がりの程度に帰着してしまう。それでは，通時態を理論化する積極的な意義が喪失してしまう。このような疑問を抱いているときに，立川の指摘に出会うことができた。立川によれば，ソシュールの「語る主体」は，正確には「聴く主体」であるという。発信者ではなく，受信者の観点からソシュール理論が構成されていると認識し直すと，すべての疑問が氷解する。つまり，所与と所識が成態であるということは，受信者における出来事ではなく，発信者における出来事であると理解できるのである。だから，発信された「見本」，つまり所与と所識の成態に合わせて，受信者は，

そのつど所与と所識を成態化しなければならないのである。

廣松は，所識は所与以上のあるものであり，能識者は能知者以上のあるものであると言うだけで，所与を，そして能知者を，積極的に意義づけてはいない。とりわけ，能知者が置き去りにされている。このことへの疑問も，廣松理論が受信者の観点から構成されていると考えれば氷解する。廣松理論では，所与と所識の成態を見本として発信するのが能識者である。そして，その見本に合わせて，意味されている所与を，意味している所識として受信するのが能知者である。このように考えれば，廣松が，所与と所識の成態，および能知者と能識者との成態との四肢的に存立する構造が「事態＝コト」であると言っていることは，受信事態を意味していると理解できる。

能識者の関与を前提とした廣松的能知者は，仮説1で提示した赤ちゃんの立場にある当事者である。当事者が仮説2で提示したお母さんの立場にあるときには，既に論じたように，ただ「おのずから現れ／みずから表す」事態に甘んじているのではなく，自覚的に「おのずから表し／みずから現れる」事態を受け入れているのである。お母さんは，単に能知者と能識者の成態としてあるのではない。一方では，おのずから現れる事態を，赤ちゃんが，おのずから表していることとして自覚している。他方では，みずから表す事態を，赤ちゃんに従属して，みずから現れることとして受け入れているのである。このような事態では，能知者と能識者を反転させることで，所与と所識の成態に揺さぶりをかけて動態化する実践的営為が実現してゆく。動的である点で，実践的能知者は，能識者以上のあるものなのである。

立川が，ソシュールの通時態は，運動しつつある「力」として理解されなければならないと指摘しているのを知って驚いた。立川は，それ以上に展開してはいないが，この指摘によって，ソシュールがアナグラム研究へと分け入ってしまった謎が氷解する。お母さんにとって，赤ちゃんは工作的操作の対象であるが，その赤ちゃんは，すぐれて呪術的な存在であり，その呪術性によってお母さんを拘束しているのである。母親がお母さんになるためには，工作者でありながら，その工作者的立場を放棄する決意をしなければならな

い。つまり，赤ちゃんはモノ的存在ではなく，ヒト的存在であることを自覚しなければならない。アナグラムは，呪術的な事態に潜んでいる工作である。

赤ちゃんがヒト的存在であることなど，改めて認識する必要もないほどに当然のことである。しかし，必ずしも事態が思いどおりになるとは限らないことを承知するとともに，事態が成り行かない責任を自覚的に引き受ける点で，実践的能知者は，能識者が表す成態へと同化するだけの傍観的能知者とは異なる。赤ちゃんに自覚的にかかわるお母さんにとって，事態は，常に呪術的な様相を帯びているのであり，工作的操作は，その基調におのずから引き込まれ，みずから同期化してゆくための契機に過ぎない。赤ちゃんをモノ的に扱い，「この私」へと引き込もうとして工作しているのではない。自覚的に工作する実践的能知者であるお母さんにとって，赤ちゃんの生命活動が充全に実現してゆくように，諸条件を整備することが第一義である。このような実践的関与を「輔生」と呼ぶ（深谷・向井，1988）。

実践的関与の視点からすれば，所与と所識が成態であり，能知者と能識者が成態であることより，どのように所与と所識が成態化し，能知者と能識者が成態化してゆくかに関心がある。廣松による四肢的に存立する構造の含意を読み取ってみると，所与と所識との成態化は，明らかに，パブロフに端を発するレスポンデント条件づけの事態であると認識できる。そして，能知者と能識者との成態化は，明らかに，スキナー的なオペラント条件づけの事態である。事態とは，いつも，自分を対他化してゆく過程と，自分を対自化してゆく過程との統一態なのである（向井・深谷，1989）。

レスポンデント条件づけは，初めは無条件刺激であった「ブザーの音」（所与）が，エサと繰り返し対提示する工作的操作によって，犬の唾液分泌に対する条件刺激（所識）となる事態である。このときのエサに対する唾液分泌は，犬にとっては，おのずから呪術的に現れてしまう出来事であるが，研究者にとっては，みずから工作的に表した出来事である。

他方，オペラント条件づけは，ネズミがたまたまバーを押したときに，エサをタイミングよく随伴させる工作的操作によって，エサを出させるために

（所識），バー（所与）を押す行動が確定してゆく事態である。このときのバー押し行動は，ネズミにとっては，おのずから成り行く呪術的な事態の中で，みずから表している工作的な出来事である。なぜなら，バーを押さないこともできる事態だからである。そして，研究者にとっては，みずから仕組んだ工作的な事態の中で，おのずから現れた呪術的な出来事である。

ここで，レスポンデント条件づけの事態におかれた犬は，当事者として仮説1の赤ちゃんに相当し，オペランント条件づけの事態におかれたネズミは，当事者として仮説2のお母さんに相当すると理解できるだろう。実践的能知者であるお母さんにとっての赤ちゃんは，オペラント条件づけの事態における研究者に相当するのである。なぜなら，お母さんが赤ちゃんに対応する事態は，お母さんにとって，赤ちゃんがみずから工作的に仕組んでいるのであり，その成り行きは，赤ちゃんしだいで，おのずから現れる呪術的な出来事であると自覚されているからである。だから，対象をヒト的に扱うということは，実に，工作者が自覚的にオペラント条件づけの事態におけるネズミになることを意味している。この意味でのネズミが，実践的能知者である。他方，モノ的に扱うということは，レスポンデント条件づけの事態における研究者の立場に立つことを意味している。この意味での研究者が，俸観的能知者であり，能識者であることを意識的に表そうとする能知者である。

廣松が四肢的に存立する構造が事態であると言っている含意は，第1に，能知者として存在する「犬・ネズミ・赤ちゃん」に対して，能識者として存在する「パブロフ・スキナー・お母さん」が，それぞれ関与する事態を意味している。そして第2に，所与である「ブザー・バー・オッパイ」が，「唾液分泌・押す・吸う」という行動を媒介として，「合図・道具・安心」という所識として成態化される関係を意味していると理解できる。廣松は，3項図式を批判することに性急なあまり，所与と所識の2項が成態化してゆく背景に，見本を提示する能識者が，第3項として介在していることから目をそらしている。そして，能知者と能識者が成態化してゆく背景には，能知者が能識者以上のあるものとして呪術的に実践する動的事態を，正しく認識でき

ていない。この意味でやはり，廣松の理論構成は，傍観的能知者である「この私」の視点にとどまっていると言わざるをえない。

本論を終えるにあたって，廣松の概念を，実践的能知者である「自分」の視点へと変換させて再構成する試みをしておこう。このためには，「自分」ということが，「あなた」を契機として，話し手あるいは聞き手として，みずから表すことであると同時に，おのずから現れることであると再確認しておかなければならない。そこでまず，みずから自分を話し手［聞き手］として表そうとする背景には，おのずからあなたが聞き手［話し手］として現れるはずだという予期が含まれていることを確認しておく。そして次に，みずから自分を話し手［聞き手］として表そうとする背景には，おのずからあなたが聞き手［話し手］として現れたという想起が含まれていることを確認しておく。このことを裏返して言い換えれば，あなたがみずから聞き手［話し手］として表したときに，自分がおのずから話し手［聞き手］として表すことができたことを想起して，自分がみずから話し手［聞き手］として表せば，あなたがおのずから聞き手［話し手］として現れるはずだと予期することができるのである。この意味で，事態が「おのずから／みずから」の統一態としてコンテクストを表現すると同時に，「予期／想起」する自分もまた統一態としてコンテクストを読み取っているのである。

ここでは，予期的にコンテクストを読み取ることをフィードフォワード（feedforward）と呼んでおき，想起的にコンテクストを読み取ることを，フィードバック（feedback）と呼んでおく。フィードバックとは，あなたが発信している所識に合わせて，所与となった徴候あるいは見本を確認して調節する受信過程である。フィードフォワードとは，あなたに受信してもらえるように，所与となる徴候あるいは見本を所識に同化して発信する過程である。このときの「あなた」を，廣松の用語を流用して「契機的能識者」と仮称しておく。この意味での能識者は，フィードフォワードおよびフィードバックの循環の実現を促進する契機であり，自分自身の出来事であって，「この私」にとっての「他者」ではない。つまり，廣松的に，能知者以上のある

ものとして存在する支配的能識者として考えてはならない。能識者に仮借して自分自身を表現する実践的事態では，能知者は，能識者以上のあるものであり，共時的成態を具現しようとする支配的能識者を乗り越えてゆくものである。このような「自分」を，「実践的能知者」と仮称しておく。

このような循環的関係を理解したうえで，廣松の四肢構造態を，実践的視点から動的過程として図解すると，下の図4のようになる。

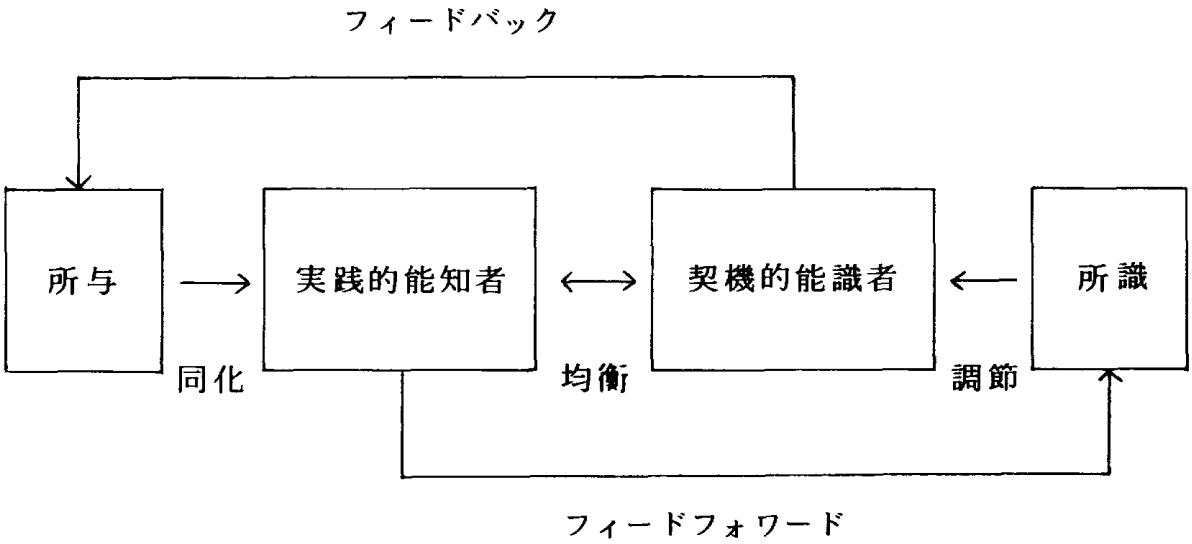


**図4　実践的視点から見た「自分」の循環過程**

本来，「あなた」は「自分」であるにもかかわらず，その契機的能識者を支配的能識者として錯認したときに，フィードフォワードとフィードバックが分裂してゆく。フィードバックに偏向している事態では，能識者が支配的な他者として現れ，自分は「この私」以上の他者に服従しているものとして現れる。フィードフォワードに偏向している事態では，自分を支配的な能識者として表し，「この私」以下の他者に対して服従すべきものとして表す。服従する私にとって，別存する他者は，私が同化しなければならない能識者である。支配する私にとって，別存する他者は，私へと同化しなければならない能知者である。いずれにしても，能識者は，能知者以上・以外のあるも

のとして別存するのである。言い換えれば，能知者以上・以外のあるものとして能識者を意識しなければならない事態では，能知者と能識者は，その場を類別的に分け合う共同的成態ではあっても，その場を創発的に分け合う協働的成態ではない。

最後に，「自分」とは，その場を創発的に「あなた」と分け合う事態の表現であり，「あなた」こそが「自分」であることを再確認して，これ以上の理論的展開は，別稿に譲ることにする。ご批判・ご検討をいただければ幸いである。

## 引用・参照文献


土居健郎　1965　精神分析と精神病理（第2版）　医学書院

土居健郎　1975　「甘え」の構造（第2版）　弘文堂

深谷澄男・向井敦子　1988　相互障害・相互輔生・相互革生の見とどけと工作の実践　国際基督教大学学報Ⅰ－A「教育研究30」107-147.

Guntrip, H. J. S. 1971 *Psychoanalytic theory, therapy, and the self.* New York: Basic Books, Inc.

小此木啓吾・柏瀬宏隆(訳) 1981 対象関係論の展開　誠信書房

Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations.* New York: Wiley and Sons.

大橋正夫（訳）　1978　対人関係の心理学　誠信書房

廣松渉　1988　哲学入門一歩前：モノからコトへ　講談社現代新書916

池上嘉彦　1982　表現構造の比較：スル的な言語とナル的な言語　国広哲弥（編）　日英語比較講座：第4巻　大修館書店, 67-110.

Jung, C.G. 1963 *Memories, Dreams, reflections.* New Yotk: Pantheon Books.
河合隼雄・藤縄昭・井出淑子（訳） 1972 ユング自伝 Ⅰ＆Ⅱ みすず書房

木村敏 1972 人と人との間：精神病理学的日本論 弘文堂

鯨岡峻（編訳著） 1989 母と子のあいだ：初期コミュニケーションの発達 ミネルヴァ書房

丸山圭三郎 1981 ソシュールの思想 岩波書店

向井敦子・深谷澄男 1989 A／Bパターンの生成と心理学的実践工作 国際基督教大学学報Ⅰ－A「教育研究31」，127-171.

中村陽吉 1990 「自己過程」の4段階 中村陽吉（編） 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会，Pp.3-20.

小此木啓吾 1985 現代精神分析の基礎理論 弘文堂

小此木啓吾・渡辺久子（編） 1989 乳幼児精神医学への招待（別冊発達9） ミネルヴァ書房

Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs,* 80, 1, 1-28.

Skinner, B.F. 1957 *Verbal behavior.* New York: Appleton-Century-Crofts.

滝浦静雄 1990 「自分」と「他人」をどうみるか：新しい哲学入門 NHKブックス596

立川健二 1986 「力」の思想家ソシュール 書肆風の薔薇

立川健二・山田広昭 1990 現代言語論 新曜社

Wauchope, O.S. 1948 *Deviation into sense: The nature of explanation.* London: Faber & Faber.

深瀬基寛（訳）　1984　ものの考え方：合理性への逸脱　講談社学術文庫

やまだようこ　1987　ことばの前のことば：ことばが生まれるすじみち1　新曜社

安永浩　1987　精神の幾何学　岩波書店

# PSYCHOLOGICAL IMPLICATIONS OF "YOU" AS A MEDIATOR ACTUALIZING SELF AND EGO

**(English Résumé)**

Atsuko Mukai and Sumio Fukaya

Figure 1 shows singular and plural forms of English personal pronouns and their corresponding present forms of be verb. An inexperienced student of English said there was something unacceptable in the figure. Please look over the figure to guess his question.

His question is why the singular form in the second person is identical with the plural, though the singular form in the first and the third person is distinguished from the plural. Another question is why 'Are' is used after 'You' even in the singular form. Shouldn't 'Are' as a be verb follow the plural form of a subject?

These questions given by the innocent student have strongly stimulated the authors. If the singular form of 'You' simultaneously implies plurality, who and who are held in the mind of a speaker?

Let's suppose the interpersonal situation, where Jack and Betty are in the discourse. When Jack is conscious of himself as a speaker, 'You' for Jack is naturally Betty. When Jack is aware that Betty expresses herself as a speaker, Jack inevitably stands as 'You' for Betty. This implies that the two persons' discourse begins with the complementary consciousness of 'You', and goes on with the recurrent exchnage of 'You'.

The use of 'You' is well correspond to the use of Japanese word 'Jibun'. 'Jibun', as well as 'You', has two aspects. In one aspect, 'Jibun' expresses

oneself as an actor. And in the other aspect, 'Jibun' realizes oneself as a mediator that makes it possible for the other person to express oneself. When 'Jibun' becomes conscious of expressing oneself as the second person, 'Jibun' gets aware of realizing oneself as the first person. Therefore, 'Jibun' or 'You' can be recognized as a complementary and recurrent unity, which is ready to express oneself in one context, and which is ready to realize oneself in the other context. The singular form of 'You' may reflect the unity of recurrence, and the sense of plurality of 'You' may reflect the complementarity of the two possible aspects.

Next, let's take a view of the interpersonal situation, where Betty, Jack, and Tom are in the discourse. Here, the singular form of the second person will be symbolized as 'You', and the plural form as 'You'. When Betty calls herself as 'I', Jack or Tom is 'You', or Jack and Tom are 'YOU'. In the three persons' discourse, 'You' for Betty remains uncertain till Betty decisively points out either Jack or Tom. When Betty chooses Jack as 'You' or 'WE', Tom is inevitably signified as 'not You' or 'THEY' in her mind.

From this, 'YOU' can be recognized as a possible state which may divide into 'WE' or 'THEY'. In this sense, 'I' is the first person or a subject, and 'YOU' is the third person or an object. Because 'YOU' judged as 'WE' is subordinate to the subjectiveness of 'I', and 'YOU' judged as 'THEY' is opposed to the subjectiveness. Both subordinates and opponents are not 'You' after all.

Then, we can define 'Self' as 'i' who recurrently and complementarily generates from 'You', and 'Ego' as 'I' who subjectively and decisively classifies 'YOU' as subordinates or opponents. In other words, the consciousness of 'You' is a process of self-expression, and the signification of 'YOU' is a processing of ego-realization. These two aspects are also complementarily integrated into 'Jibun'.

Hypothesis 1 takes the point of view of a baby in the interaction with its

mother, and gives some assumptions on how to realize its 'demanding-ego'. Reversely, hypothesis 2 takes a point of view of a mother in the interaction with her baby, and gives some assumptions on how to express her 'contacting-self'. The demanding-ego illusionary develops its internal subjectiveness in the support of 'You', so that 'I' can dependently occupy the center of its phenomenal world. On the other hand, the contacting-self realistically acquires its external objectiveness for the support of 'You', so that 'i' can dependently share its ecological world.

'I' demands and expects how the world should go on, and so 'I' must be very conscious what might be assimilated by 'YOU' in the reflection. This process is called as 'feedback' in the figure 4. 'i' contacts and foresees how the world can go on, and so 'i' must investigate what can be accommodated by 'You' in the trial. This process is called as 'feedforward' in the figure 4. 'YOU' demonstrates standards to be accommodated for regulating the demanding-ego. And 'You' illustrates clues to be assimilated for planning the contacting-self. These recurrently on-going processes are integrated and illustrated into a kind of cybernetic system in the figure 4.